

ライブラリー

新刊紹介

ドーク・バーネット著

『中国—毛沢東以後への過渡期』

中嶋領雄

(東京外国語大学助教授)

中国という世界は深く広い対象であり、単なる印象批評や表層をなぞらう類の観察ではつかみ得ない対象である。いわゆるチャイナ・ウォッチャーないしは、ベキノロジストの次元を超えた、総合科学としての現代中国学 (Contemporary China Studies) はいかにして可能か、という課題に、いまやアメリカイギリス、ソ連、西ドイツなど各国の学究は真剣に取り組んでいる。そうしたなかで、アメリカの中国学界が高いレベルの研究者層を最も厚く擁していることについては、いまさらいうまでもないであろう。

本書の著者A・ドーク・バーネットは、そのようなアメリカの中国研究者としてはもっとも広く知られており、わが国にも『毛以後の中国』(一九六七年)などが翻訳されているが、かつて新中国の成立を現地に見た著者が23年ぶりに訪中した体験をもふまえつつ、毛沢東以後の時代への「不確かな道程」(Uncertain Passage) という本書の原題)にある

中国を総合的に分析し、展望したのが本書である。私は、本書が刊行されるとすぐに原著に接し、いまた邦訳を読んでみて、本書は著者のこれまでの研究の全成果を投じた野心作であると思う。同時に、著者も述べているとおり、本書はアメリカの現代中国学の成果を広く反映した著作だといえよう。

著者が本書で焦点にすえているのは、いわゆる 'succession' (毛沢東権力の継承) の問題であり、中国の政治的・社会的諸力に対する理性的な分析を通して、この問題を考えようとしている。そして著者は、「真面目な研究者は誰でもが知っているように、中国について一つ確かなことは、予期しないことが起る



ことを考えておかなければならないということである」と前提したうえで、価値と制度の問題、軍の役割、経済戦略、リーダーシップおよびエリートの問題、中国の外交政策、アメリカにとつての中国の六つのポイントに対して、主に中期的な展望(基本的には七〇年代の残りの部分)を与えている。それだけに、いわゆる「四人組」追放というドラマが現実化した今日の中国に照らして、本書を批評せざるを得ないのだが、北京政変後に読んでみてなお本書の含意は随所に光彩を放っているといつてよい。もとより、著者が「四人組」失脚の具体的なシナリオからプロットまでを予想したのではないが、分析の論理的帰結とし

て、「党指導者の張春橋・王洪文」、「軍指導者の李德生・陳錫聯・許世友」、その他の「汪東興と華国鋒」という政治的先導者に関する構図を、すでに2年余まえに提示し、「もし周恩来が毛沢東より長生きしないとすれば……継承によって公然たる権力闘争が早まる可能性を否定しきつてしまうことはできない」と述べている点などは、その鮮やかな一例だといえよう。ともあれ、本書は、論調全体が言葉のいい意味できわめて常識的であり、際立つて読者をハッとさせることは少ないが、それだけに、強い説得力と論理の安定性をそなえている。

本書のような大部の良書が、いかにもこの著者の訳者にふさわしい石川忠雄教授指導下の研究者グループによって丁寧に訳出されたことに対し、敬意を表するものである。

(鹿島出版会 一九〇〇円)

西山千明著

『マネタリズム—通貨と日本経済』

高野邦彦

(本誌)

「貨幣供給量(マネーサプライ)の増加率が過大(たとえ20%を超える)であれば、インフレは必至であり、それが過小(たとえ10%以下)であれば、不況が深刻化する」——これがマネタリズムの重要な命題の一つであるがこのことをしだいに多くの人々も理解するようになった。だが、一歩突っ込んで、ではマネーサプライが、どのような根拠とプロセスを通じて、インフレを高進させ、あるいは不況を激化させるか、という理論的な問題、さらには「特定の国でどのようなマネーサプライが適正量か」という政策的な問題になる」と、一般の人ほもちろん、相当な専門家でも

とくにケインズ派の経済学だけを身につけた人々は、理解がややしくなる。せいぜい古典的な貨幣数量説からの類推で考える程度ではなからうか。

本書は、そうした不徹底な「マネタリズム」に対する認識をただし、さらに突っ込んでその思想的基盤および、その現実への適用の仕方を明らかにしてくれる。とくに筆者の関心は、現実の政策面に向けられているために「マネタリズム」による経済政策批判(第II部「日本経済への批判と提言」)は、本書の圧巻で、「マネタリズム」の実践的意味を知るにはまたとない好テキストである。

筆者である西山千明・立教大学教授は、日本における代表的なマネタリストとして著名であり、D・A・ハイエク教授、ミルトン・フリードマン教授など、いわゆる新自由主義派(モンペルラン・ソサエティ)といわれるグループの一人でもある。したがってこの「マネタリズム」は、自由社会のイデオロギ—とマーケット・メカニズムの擁護、そしてそれらを正常に機能させるための不可欠の条件としての通貨供給率の適正化を、その主要な内容とするものである(とくにI部「マネタリズムの体系」)。

「マーケット・メカニズムは、自由社会がこれに与える規制の枠内ではじめて活動を許されるとき同時に、その活動のためには、いくつかの条件が政府によって用意され堅持されなくてはならない。通貨秩序もそのひとつである」。これが自由経済とマネタリズムとの根本的なかわり合であると説く。

「マネタリズム」の最も興味深い視点の一つは、貨幣を「情報に対する代替財」であると規定している点だ。市場がある財の均衡価格を発見する上に、情報コストを考慮しなけれ